

**博士論文審査結果の要旨 及び
最終試験の結果又は学力の確認報告書**

(課程博士)

論文提出者 氏名	渡邊 亮			
論文審査委員	主 査	高橋 恒夫	副 査	石井 敏
	副 査	有川 智	副 査	
学位論文題目	宮城県多賀城市を中心とした板倉の形態と技法			
<p><博士学位論文の審査 及び 最終試験の結果又は学力の確認 1,000 字以内></p> <p>板倉の歴史は原始・古代にまで遡るが、住宅主屋の付属屋であるため、これまではどうしてもメインのテーマとしての調査・研究は少なかったといえる。</p> <p>板倉には大きく分けて、「井籠倉」や「落とし板倉」、「はめ板倉(羽目板倉)」が存在するが、宮城県とその多賀城市では、主に靱の貯蔵の目的で「はめ板倉」が広く分布している。明確な定義はないが、この「はめ板倉」のうち柱が密に並んでいるものを「繁柱(しげばしら)」と仮称しており、多賀城市でもこの「繁柱」が注目された。当地域より北東に位置する北上川流域の「繁柱」の板倉については、先行する調査・研究があるが、今後の課題として、宮城県における「はめ板倉」の基本形式の検討を進める必要がある、と述べている。これを受けて、本研究では多賀城市を中心とした周辺地域の約 70 棟の板倉実測調査を行い、その形態と技法を考察したものである。</p> <p>その結果、多賀城市の板倉の特徴は、①板壁を横張りとした「はめ板倉」、②板壁の接合の多くは合決り、③板壁外側に貫を用いる、④小屋組は和小屋組と合掌組の複合形、である。中でも、横板張りの板壁のまま 1 尺程度まで柱間隔を狭くしている「繁柱」や、二枚板張りの技法、置き屋根など大工職人の技法を駆使した上質の板倉も認められた。</p> <p>県内全体で見れば、①1.5 尺程度の柱間隔、②これらの柱を横張りの板壁で組む、③貫が外側に生まれ、これが大部分を占める基本形式であると言える。一方で、気仙沼市や石巻市をはじめとした北部沿岸地域では、④1 尺以下の「繁柱」、⑤縦張りの板壁、貫は内側に組む形式が浸透している。そのうち多賀城市の板倉は、郷倉の図面や他地域との比較から基本形式とそれに近い形式も少なくないが、半数近くは横板張りの「繁柱」が定着していた。柱幅よりも狭く並ぶ「繁柱」も確認でき、板壁の面積が更に小さくなり断熱性・気密性を上げること、また木材を豊富に使うことで財力を示すことがその背景にあったと考えることができた。以上のことからこの地域を中心とした「はめ板倉」には、大工職人による板倉の多様な技法が確認できたが、これらの技法は一様に土蔵に近い気密性を求めてのものであったと考察できた。</p> <p>審査会では、本論文の内容が査読付き論文 1 編で採用掲載されていることを確認し、その結論について審査を行い、博士(工学)の学位論文として相応しいと判断した。また最終試験においても、合格との結論を得た。</p>				
最終試験の合否	合格	審査日	平成 28 年 2 月 19 日	
主査教員氏名	高橋 恒夫			